北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

経済学と農業経済学との関連

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2012-11-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 赤岩, 金太郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001452

経済学と農業経済学との関連

赤　岩　金太郎
北海道教育大学岩見沢分校経済学教室

Kintaro AKAIWA : The Relation of between Economics and Agricultural Economics

目　次

序
Ⅰ　農業経済学展開の二形態
Ⅱ　農業経済学と経済学間の分科と綜合
Ⅲ　農業経済学の本質的課題

序

近来の農業経済学の課題は，端的にいって，農業人口と農産物需要の対応のうえに見出されるといってよいであろう．そして，それらの理論の背景に歴史的な現実の農業経済がある．

日本における近来の農業を，農業基本法がとらえるところでは，そこに，農業の生産性と農業構造の問題を示すが，それらの問題も，農業人口なり，農産物需要なりの課題に連る．斯法制定以来，農業政策もこれに従って実施されてきたところだが，最近の一般論議では，農業の実態は必ずしも政策の所期の動きを示してきていないことが問題になっているようだ．理論に沿う現実の動きであるか否かはさておき，このような農業の現実が農業の理論に連なるものであることは否定しえぬものといってよい．農業人口の問題や農産物需要の問題の論理を見究わめ，拠って来たる経過を確めることが，それらの方向をとらえる条件となろう．農業の理論とその歴史が確められねばならぬことである．

Ⅰ　農業経済学[1] 展開の二形態

Colin Grant Clark は，世界各国の国民所得水準を比較して，経済進歩を示すものとしての国民所得の増大とその諸条件を明らかにしようとし，一国の資本と労働および所得が，第一次産業から第二次産業へ，さらに，第二次産業から第三次産業へとその比重を増大するにつれて，国民所得水準が上昇すること，すなわち経済的に進歩することを証明した．[2] このことはまた，経済進歩の過程で，各産業のウエイトが転移するということを示し，そのなかで，農業のウエイトは低下するということを明らかにしたものでもある．

資本主義経済以前ないし資本主義経済建設の時期には，農業経済はすなわち一般経済でもあつたが，しだいに，農業経済は一般経済のなかで部分化を進め，かつ特殊化してきている．しかしそれによって，農業経済の意義が明瞭になってきたともいえるであろう．資本主義一般経済に対応する農業経済の在り方は各国一様ではない．一般経済の在り方が異なるに応じて，農業経済の在り方もそれに準じている．そのような過程で，農業経済学の展開について，とくに明らかに特徴的な二つ

の形態を認めることができるようだ．一つはドイツにおけるそれであり，また一つはアメリカにおけるそれである．これを，Leo Drescher は次のようにとらえる．

「アメリカにおける農業経済的科学の建設には，特に近来，古典派経済学の形成が強い影響を与えている．それに対して，ドイツでは，歴史学派の思想がなお効果的に作用していると思われる．歴史学派の影響のもとに，社会政策，財政政策，農業政策のごとき経済政策の種々の部門が，国民経済学の特殊部門として成立した．しかし，両国にこのように異った発達をしたより深い根拠は，科学者の自由選択や特性によるものではなく，他の社会的，地理的関係ならびに哲学的傾向における差異によるものであることが明らかである．[3)]

さらに，Drescher は，アメリカにおいて，ドイツにおける在り方とは異なる，このような農業経済学が発達した所以を説いている[4)] が，その所説の内容について，高倉教授はつぎのように解明している．

1．亜米利加大陸に存在した無尽蔵な土地のために国家は国民の経済生活の調節をそれに任せ，干渉を試みる必要がなかつた事，従って社会経済組織は自由なる個人を基として築かれ，その関係は経済発展の時代にそのために必要だった個人の関心を基として打立てられた古典派経済学の生れた環境に類似して居た事．

2．広大なる打つづいた地積から生ずる社会関係の単純性，殊に市場の一様性と広大性とは妨げられる事なき企業心と相俟って驚異に価する経済組織を，学問とは無関係に出現せしめ，学問は，後から，是等の内から，法則を発見し是を応用することによって多くの問題を解決する事が出来た事．

3．アングロサクソンの子孫を主とし又困難な開拓生活をしてきた所から亜米利加人は，現実的であり，合理主義的である故に哲学的思想を軽視し，純粋科学を目標として自然科学的方法を重んじた事．[3)]

ひとしく資本主義をとりいれたドイツとアメリカの両国であるが，これを修正して展開せざるを得なかった経済の国と，これをより素朴に展開することを可能にした経済の国とのちがいがある．そのちがいは，統制経済と自由経済としてとらえられてよいようだが，それらの一般経済の影響が両国の農業経済学の建設に及んで，異色の展開を果させたのであると Drescher は解するようだ．さらに，両国の経済の在り方のちがいを来したのは，経済を裏付ける要因の差異に基づくという．それらの要因のちがいというのは，古い歴史をもつ社会関係と新しい歴史をもつそれとのちがい，狭隘で乏しい資源と広大で豊かなそれとの地域環境のちがい，観念主義といえる哲学的思想と合理主義といえる現実的方法とのちがい，などがあげられるようだ．ドイツの農業経済学とアメリカのそれとの概念に根本的な差異を生じたのには，遠く，広く，かつ深い諸関係のうえの原因が横たわつているものと解するのである．

農業経済は必然的に一般経済に連なり，また農業経済学は必然的に一般経済学に対応して展開するという論理が，そこに見られよう．

註

1) 農業経済学は農業経済に関する特殊理論で，農業経済論ないし農業理論などともおよばれ，経済学は一般経済に関する綜合理論で，一般経済学，社会経済学ないし理論経済学などともよばれるようだ．本稿では，これらの用い方について，あえて統一せずにそのときどきの用いように従った．

2) C. G. Clark, The Conditions of Economic Progress. 1940, 3rd ed.1957, 大川一司，小原敬士・高橋長太郎・山田雄三訳編，経済進歩の諸条件，1953～55.

3) Leo Drescher, Agrarökonomik und Agrarsoziologie. Ueber die Aufgaben und Grenzen der Agrarwissenschaften. Ein Vergleich zwischen der Entwicklung in Deutschland und der in den

Vereinigten Staaten von Amerika. Jena. 1937, A. Agrarökonomik 3, Die Untershiede zwishen der deutschen und amerikanischen Auffassung von Gegenstand und von dem Methoden der Agrarökonomik. a) § 21

Auf den Ausbau der agrarökonomischen Wissenschaften in Amerika hat namentlich in den letzten Jahren die Fortbildung der klassischen Nationalökonomie den stärksten Einfluss gehabt. In deutschland dagegen sehen wir, dass die Ideen der historischen Schule noch wirksam geblieden sind. Unter dem Einfluss der historischen Schule entstanden als besondere Abteilungen der Volkswirtschaftlehre die verschiedenen Zweige der Wirtschaftspolitik wie Sozialpolitik, Finanzpolitik, Agrarpolitik. Die tieferen Gründe für die in beiden Ländern so verschiedene Entwicklung liegen aber nicht in einer Willkür und Eigenart der Sozialwissenschaftler, sondern werden zu erklären sein durch die anderen sozialen und geographischen Verhältnisse und durch den Unterschied in der philosophischen Tradition.

4) Leo Drescher, ibid. A. 1. Entwicklung der Agrarökonomik in Amerika. § 15

5) 高倉新一郎，農業経済学の発達，7頁（法経会論叢，第八輯別刷，昭和15年）

II 農業経済学と経済学間の分科と綜合

経済学と農業経済学との関連のあり方については諸説がある．農業経済学を，その対象なり，課題から，技術的にとらえるばあいや，経営的にとらえるばあいや，また，政策的にとらえるばあいやはさておき，社会経済的にとらえるばあいにあっても，農業経済学は経済学の一分野における理論であって経済学に綜合されるという見方や，前者は後者から分科した理論であって，独立の科学であるとする見方があり，それぞれの見方においても，理論は必ずしも均しくなく，根拠は必ずしも同じくない．いま，若干の説をとりあげて見よう．

大島教授は次のように述べる．

「経済学の一特殊部門または分科的科学たる農業経済学なるものの成立は認めがたい．……理論経済学の分科的特殊的科学としての農業経済学といえば，農業における特殊な生産関係を明らかにすることを主要な任務とし，したがってそれは地代論を中心課題とすることになろうが，もともと地代論は理論経済学の不可欠の一章であり，地代論によって資本主義的な土地所有の性質が明らかにされ，また農産物を規制する市場価値法則の特殊性が解明されるのである．かくしてまた，資本の一般的法則が土地所有の介在によっていかに偏倚せしめられるか，そしてまた，偏倚せしめられながら価値法則はいかに貫徹されるかが明らかにされて，はじめて資本の分析が完全になり，資本制社会が一社会として成立しうる根拠も明らかにされるのである．……農業経済論の主たるテーマはこの<資本主義の農業問題>を明らかにすることにあると考えられる．それは一言にすれば農業問題の理論にほかならない．」[1)]

と主張して，経済学から分科した科学としての農業経済学の成立を認めていない．理論経済学の一分野の理論と認め，資本の活動を阻む土地所有の問題がとらえられているのだが，そのことからは，農業経済学が理論経済学から独立した体系をもつ理論科学とはならないという．

阪本助教授はいう．

「農業経済学というものは，経済学の一分科にすぎぬものであり，それじたい独自の，完結した理論体系をもつ科学ではない．理論経済学の一般的・抽象的原理が，農業という特殊な産業部門で，どのような現象形態をとって，具体的に，あらわれるかを研究するのが，農業経済学であるにすぎない．……理論経済学の理論体系がおわったところから，農業経済学の理論体系がはじまるのではなくて，理論経済学のそれとおなじ論理大系のなかに，もともと農業経済学は包摂されるものだ．

……」[2]

農業経済学が理論経済学の分科であることは認めるのだが，独立の体系をもった科学であるとは認めないのである．農業経済学の理論体系は，理論経済学のそれだと考えるのである．

久保田教授は，

「農業経済学とは，経験的文化科学としての経済学の認識目的に準拠して，農学の一面に農業経済現象を解釈し取り，其の農業経済現象の諸関係を客観的に記述し，説明し，且つ又之を文化科学的に普遍化する所の，経済学の一分科，即ち特殊理論経済学である．」[3] という．その根拠や，対象や，理論は特殊な見方であるが，農業経済学を特殊理論経済学として，経済学の一独立分科科学と解するのである．

リヤシチエンコは，

「理論経済学の一部門としての農業経済学は，農業における社会経済的諸現象と諸関係の研究を対象とする農業社会経済学である．」[4]

と規定している．農業経済学を農業の社会経済現象としてとらえ，理論経済学の独立分科科学として認めるのである．

硲教授は，

「農業経済学は，理論経済学の延長をなす一部であり，後者の理論的帰結を前提し，これを出発点として，より具体的に規定せられた科学である．われわれはここで簡単に経済学をば，近代社会で不特定の歴史的時期における生産力の発現，統合形式としての資本がとるいろいろな経済形態を究明する科学，約言して資本の科学とみなしておこう．しかるときは農業経済学は，農業における資本の科学，ないし農業における近代的生産事情を社会経済的側面から究明する科学であるということができよう．しかるときはこれら二つの科学は，別個の切離された科学ではなく，むしろ両者は全体と部分，一般と特殊，抽象性と具体性といったような，緊密な関係にあることが，容易に推測しえられるのである．」[5]

と述べ，それは理論的な仮説であるとしてとりあげている．地代論は理論経済学の終結点であると同時に農業経済学の出発点であるとし，分配論としての地代論を中心課題とする独立した農業経済学の成立を主張するのである．

ところでDrescherはいう．農業経済学とは何であるか，何でなくてはならないか，という問題は，科学自身の問題と同様に，古くかつつねに重要である．農業がなお経済的活動の支配形態であったときは，農業の経済的科学は経済に関する唯一の科学であった．しかしながら，資本とか，所得とか，生産費や利潤などの概念は工業経済から生れたものである．工業の振興が今日の経済学を成立せしめる動機となったからである．しかし，貨幣資本と工業に基礎をおいた経済制度は，農業部門にあてはまらなかった．すなわち，たとえば，資本の回転がおそいため，利潤率は本質的に低く，生産の集中は困難で，経営の集約は限界を認めねばならないことが解ったからである．それゆえに，農業経済学の特殊的役割は，つねに，農業の特性である問題の複雑性を解決するという点にある．すなわち，農業経済学とは，経済学の原理をそのまま経済部門たる農業に応用するものではなくして，一般経済学を農業生産のために改め，順応させようとするものである．この関係は，農業経済学の本質に連なり，アメリカの農業経済学の支持者によってとくに強調されているのである．……」[5]

工業の振興が経済学を展開させたと見るのだが，経済学の展開とともに，経済を支配していた農業が，経済のなかで部分化し，一般性から特殊化してきた．経済学の理論は，農業において，是正されて順応されなくてはならない．それが農業経済学の課題だというようである．このような経済学との関連で，農業経済学は独立すると解するものと思われる．

以上の諸説を概観すると，経済学の理論の綜合性と農業経済学の理論の分科性の問題は異論があつて，必ずしも定説をとりあげ難い．農業経済学が独立科学であるか否かは，その理論が独自の組織体系をもち，経済学の理論によって，ゆがめられないか否かであろう．そのことが何れも正しくたしかめられていないといえよう．それにしても，農業経済学に独自の理論があり，その理論が経済学の理論と関連するということは認められるといえよう．

資本主義経済学の展開のうちに農業経済学が経済学の一般的な位置から部分的な位置に移ったことは，農業の所得が他の産業の所得よりも小さくなったことであり，このことはまた，農業の資本主義化がおくれることも意味していた．このことはさらに，その要因に土地所有の問題があることがとらえられてきた．農業経済学の理論的中心課題であるわけだ．そして，いってみれば，それは農業経済学の分科のうえの問題であり，また，農業内部の問題ともいえよう．

この農業内部の問題とともに，農業外部の問題がある．資本主義経済において，その生産は，資本と労働との結合によって商品が生産されるとみるとき，一方には，労働者を雇用して商品生産を行い利潤を追求するところの資本主義化した工業があり，他方には，主として労働者の雇用にたよらず，業主とその家族によって生産を行うという資本と労働がいまだ分離しない資本主義のおくれた農業があって，両者併存の間に，資本と労働の移動と商品の流通が行われる．これが両者の関連の理論的内容の要点であって，この関連が農業の外部の問題となる．

註

1) 大島　清：改訂農業問題序説，1955，時潮社，17～20頁
2) 阪本楠彦：農業経済概論，上，1964，東京大学出版会，序文3頁
3) 久保田明光：農業経済学の基礎理論，1949，早稲田大学出版部，18頁
4) リヤシチエンコ著，直井武夫訳：農業経済学，上巻，1934，白揚社，18頁
5) 谷　正夫：農業経済学序説，1942，慶応書房，7頁
6) Leo Dresher : ibid. A. 1. §15

Die Frage, was "Agricultural Economics" ist oder sein soll, ist so alt wie die Wissenschaft selber und wird immer wieder gestellt. Als die Landwirtschaft noch die vorherrschende Form wirtschaftlicher Betätigung war, konnte die Wirtschaftslehre vom Landbau, soweit sie entwickelt war, als die alleinige Lehre von der Wirtschaft gelten. Die modernen Begriffe wie Kapital und Einkommen, Produktionskosten, Profit usw. sind aber orientiert an der Industriewirtschaft, denn der industrielle Aufschwung gab erst den Anlass für die Begründung unserer modernen Wirtschaftswissenschaft. Ein auf Geldkapital und Industrie gegründetes Wirtschaftssystem wird aber nicht seinen eigentlichen Gesetzen folgen, wenn es auf die Landwirtschaft übertragen werden soll. Man wird z. B. feststellen, dass die Profitrate wesentlich kleiner ist infolge langsameren Güterumschlages oder dass die Konzentration der Erzeugung sehr bald eine Grenze findet am Betriebsumfang. Die Sonderstellung der Agrarökonomik wird jedenfalls dadurch gerechtfertigt sein, dass ein Komplex von Aufgaben zu lösen ist, die der Landwirtschaft eigentümlich sind. Denn es handelt sich in der Agrarökonomik nicht nur um eine blosse Anwendung ökonomischer Prinzipen auf einen beliebigen Wirtschaftszweig, die Landwirtschaft, sondern um die Umgestaltung und Anpassung der allgemeinen Ökonomik für die landwirtschaftliche Produktion. Das Verbindende besteht freilich in der ökonomischen Zielsetzung und wird von den amerikanischen Vertretern der Agrarökonomik stark betont.

高倉新一郎：前掲書，4～5頁

Ⅲ　農業経済学の本質的課題

農業経済学の本質的課題は，経済学との関連のうちに見出される農業の経済的特殊性から，必然に導き出されるであろう．前出著者の説のうちからとりあげてみよう．

リヤシエンコは，つぎのごとく述べている．

「農業経済学の研究対象は，農業活動の過程のうちに生起し，且つ農業活動の個々の諸現象の聯関性と被制約性とのうちに現われるところの，社会経済的諸関係であって，吾々はこれらの諸関係をその現実的な一定の可動的均衡において，並びにそれらの歴史的形態の発生において，研究しなければならない．」[1] と農業経済学の課題を農業活動の社会経済関係に求め，さらに，「農業における社会経済的諸関係の研究の根底に，土地諸関係―その歴史的発展における，その現代の状態における，且つ他の農業諸関係によるそれらの被制約性における―を置かねばならぬのである．」[2] と，土地所有の問題を最重要視する．そしてさらに農業経済学を農業の社会理論として，

「その歴史的発生，資本主義的社会内でのその動態および静態における農業経済の社会的基礎．農業社会経済の個々の要素，基礎的関係としての地代形成，労働および資本の諸関係．全体としての農業諸関係の体制および形態の構造．再生産，収益および分配の問題．体制の諸矛盾と恐慌．」[3] と体系づけている．そこには，土地所有を根底とした農業内部の経済関係と，農業外部の経済関係の課題がうかがえる．

また，裕教授は，つぎのごとくいう．

「農業経済学は，農業部面に投下せられた資本の（したがってまた賃労働の）特有の経済的諸形態を分析することによって，農業の生産様式と生産関係を究明し，もって経済学の理論内容をゆたかにする．かくて，農業経済学は，経済学の単なる応用にあらず，むしろ農業経済学的研究によって，再帰的に，経済学理論の深化と確認をもたらすのである．」[4]

後半部分について，学者間に異論もあるが，農業経済学の特殊性によって，これを独立した分科科学として認めていて，農業の内部とともに外部の課題をも示している．なおさらに，

「農業における資本主義的生産様式とそれに照応する生産関係とを明らかにするのが，われわれの課題であるが，農業資本の運動に特有の形態を附与する歴史的社会的範疇は，さきに述べたごとく，近代的土地所有である，農業資本による生産様式を，産業資本一般による生産様式から，形態的に区別する基礎標識は，土地所有（土地面積の資本主義的利用をふくむ）の決定的干渉である．」[5] といって，土地所有，したがって地代論を農業経済学の基礎理論としてあげる．

Drescher はまたつぎのごとくいう．

「農業経済的科学の出発点と帰結に関する典型的アメリカ的なとらえ方として，Nourse のつぎのような言葉がある．“古典的および新古典的抽象的研究法の前提を総ての最高指針とする”[6] という思想である．桃の販売，純血種畜の飼育もしくは，排水施工のごとき，経済外の，技術的問題の背後に，農業経営のもっとも重要な経済的問題として，いかにすれば，生産要素の土地，労働，資本を正当な関係において，もっとも有効に使用することができるか，という問題がある．それが農業経済学の真の問題であり，それが個人のためであっても，団体・民族の一般的福祉のためであっても，それには関係なく，すべては経済的解決の如何にかかっている．その意味で農業政策は問題とならず，経済外の問題は考慮の外であり，経済的な福祉が満足され，確保されたときは，残余の問題はすべて容易に解決されるという考えに基づいている．ここにドイツの農政学の概念との根本的な差異がある．」[7]

経営経済的であるが，自由思想に基づいて，土地，資本，および労働を，合理的に結合して，生産を最大に高めつつ，所得を最大にすることが，目的の如何を問わず，農業経済学の課題であり，

それによって，すべてが解決されるとし，農業政策もそのうえでは問題にされないとみる．さらにいうならば，農業の資本主義化を強化するのが農業経済学の課題だと解される．

しかし，資本主義経済における農業経済学の課題は，その強化の当否からとらえられるものであろう．すでに確めたように，農業経済学の本質的中心課題は，土地所有であるが，農業内部の諸問題がそれに関連し，また，農業外部の諸問題が連ってある．

土地所有は農業資本の課題でもある．資本が農業の領域に入ってくるのには，封建制の歴史的遺産であり，農業に固有な土地所有の負荷を軽減ないし排除しなくてはならない．それは地代論をとらえることによって，土地所有を近代化することだし，土地の私有から共有ないし公・国有への過程の問題となろう．

また，土地に結びつく有機的生産であるために,資本の回転がおくれ,農業の利潤率を低める．経営の大規模化と作業の機械化の要求を必然にもつこととなろうが，これも農業資本の課題であろう．

さらに，農業労働力の減少傾向の課題がある．農地の制限と需要の所得弾力性の小さいことから，農業生産を拡大することがおさえられ，農業労働力の保持が，経済の進歩とともに難しくなろう．農業の技術的革新における資本の問題とともに，農業外の連関とくに消費の問題がある．

なお，農業の資本主義化の過程にあって，家族労働経営が広汎にのこり，それは労働集約性の問題をふくんで，いわゆる小農の問題をなし，かつ，農業生産力の後進性とも連なる．資本と労働の対応のうえから，農業内部の課題でもあり，農業外部の関連課題でもある．

これらの課題は，集約的に，農業人口や農産物需要の課題に連なるといえよう．

註

1) リヤシチエンコ：前掲書，13頁
2) リヤシチエンコ：前掲書，15頁
3) リヤシチエンコ：前掲書，47～48頁
4) 硲　正夫：農業経済論，1951，三笠書房，69頁
5) 硲　正夫：前掲書，92～93頁
6) E. G. Nourse : Agricultural Economics 1916, S. 6 ff.
7) Leo Drescher : ibid. A. 1. §15

Als Ausgangspunkt und Ziel ber agrarökonomischen Wissenschaft wird nach einem für die amerikanische Auffassung typischen Ausspruch von *Nourse* das ökonomische Denken angesehen, das als "Ergebnis der abstrakten Methode der Klassiker und Neo-klassiker als höchster Orientierungspunkt über allem zu stehen hat". "Hinter den äusseren und technischen Aufgaben, wie absatz der Pfirsichernte ober Züchtung reinrassigen Viehes oder Anlage einer Dränage, steht als wichtigstes ökonomisches Problem des landwirtschaftlichen Betriebes die Frage, wie am erfolgreichstem die Probuktionsfaktoren Land, Arbeit und Kapital in das richtige Verhältnis zueinander gebracht werden können. Das ist, wie *Nourse* sagt, das eigentliche Problem der Agricultural Economics, und alle Entscheidungen müssen auf dieser wirtschaftlichen Ebene getroffen werden, gleichgültig ob es sich um Privatnutzen oder um die allgemeine Wohlfahrt einer Gruppe oder des ganzen Volkes handelt. Hier ist von keiner Agrarpolitik die Rede, kein Raum für ausserökonomische Erwägungen, und die Überzeugung wird zum Ausdruck gebracht, dass alle übrigen Probleme leicht zu lösen sinb, wenn die wirtschaftliche Wohlfahrt erreicht und gesichert ist. Hier liegt der grundsätzliche Unterschied zum deutschen Begriff der Agrarpolitik, und wir werden damit hingewiesen auf die Verschiedenheit der Agrarpropleme in der Alten und Neuen Welt.

高倉新一郎：前掲書，p. 7